

The Chinese in Malaya. 1948.

The Chinese in Southeast Asia. 1951. (ここに紹介する1冊の初版)

Malaya—Communist or Free? 1954.

China, Nations of the Modern World. 1962.

The Revolution in Southeast Asia. 1962.

A Background to the Boxer Uprising. 1962.

などがある。まことに、マラヤ華僑問題を中心としての膨大な研究業績を残されたのである。自叙伝は、1946年 *Malayan Civil Service* 退官後の続巻を書くことを約束されていたが、これはとうとう執筆されないうちに終わった。Purcell 博士が代表的な1人であるが、イギリスは植民地当時、植民地官吏であるとともに、専門的な業績をあげた多くの学者をもった。おどろくべきことであり、また羨しいかぎりである。

「東南アジアにおける華僑」は、Purcell 博士の名著であるといつてよい。初版が1951年に刊行されたが、その後10数年の変化発展を補足修正された第2版は、現在、われわれがもちうる東南アジア華僑研究の最もまとまった、スタンダードなものである。

この大著は博士が一生をかけられたものといつてよい。第1編は総論であって、東南アジアにおける華僑の分布・中国の初期の東南アジアへの接触・南洋への大量移住・華僑社会の特質をとりあげる。第2編以下は、国別の華僑の歴史的発展にかんする研究であって、ビルマ、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、マラヤとシンガポール、英領ボルネオ、インドネシアおよびフィリピンにわかれる。Skinner 教授の有名な華僑研究とはちがって、本書はけっして分析的でもなければ、社会科学的方法が駆使されたものでもない。しかし、できるかぎり忠実に歴史的事実をとりまとめ明らかにしようとしたものである。この意味において、東南アジア華僑史としては、これにまさるものがない。しかも、判断は公正だ。さすがに、たんに文献によっただけでなく、1/4世紀にわたっての現地での華僑との体験をとおしての著作だけに、まことに妥当な解釈や説明にうたれる。東南アジアにおける華僑の占める重要性からして、広く東南アジアの問題に興味をもつ人に、基礎的な文献として強く推賞する。

同じく遺著 *Malaysia* は、博士の *Malaysia* の体験と研究との総合大成である。さきの東南アジア華僑研究とは異なって、*New Nations and Peoples* 双書の1

巻であるため、できるだけ、わかりやすくまた簡潔なマレーシアの紹介を本書は目的としている。まさに、一気に書きおろされたとの感じが強い。できるだけ事実には忠実であろうとするだけに、1965年いよいよ激烈となったインドネシアとの対決までとりあげられているが、1965年8月のマレーシアからのシンガポールにまでフォローされていないのは残念だ。

本書のあらましを紹介しよう。まず18世紀までのマラヤの歴史からはじまる。ついで、マラヤの民族、19世紀のイギリスの進出、英領統治、戦後のマラヤの独立への過程、マラヤ独立、サラワクとサバ、マレーシアの結成という順序で、マラヤの歴史的形成をとおり、この国の政治・経済・民族・文化などを明らかにしてゆく。博士が歴史学者であるだけに、歴史的発展過程からマレーシアがあきらかにされている。とくに、戦後のマレーシアの歴史に重点がおかれ、ゲリラ運動に詳しい。これは華僑によったものだけに、博士の特別の関心をひいたものであろう。

マレーシアの現状を知るには、その発展過程を明らかにする必要がある。そのために、本書は最もすぐれた文献であるといえよう。

いまこの遺著3冊を紹介するにあたり、Purcell 博士の偉大な業績をあらためて讃えたい。この博士を失ったことに、心から哀惜の念をおぼえる。(本岡 武)

Louis Barron (ed.) *Asia & Australasia*. in the Series of Moshe Y. Sachs (ed. & pub.) *Worldmark Encyclopedia of the Nations*. New York: Worldmark Press, Inc., Harper & Row, 1965. viii + 392p.

このたび新訂版(第3版)が出た、全5巻よりなる *Worldmark Encyclopedia of the Nations* のうちの1巻である。このシリーズは、世界中の国々の一つ一つについて、歴史、政治、経済、社会その他、国家の諸局面について、専門の学者に簡潔に解説させたものである。対象とする国々は、たんに独立主権国家だけに限られないで、たとえば、*Maldiv Islands*, *Persian Gulf Shaykhdoms* などまで含んでいる。

一つ一つの国家について、50の項目が語られている。その項目を例示すると、

1 Location, Size and Extent, 2 Topography,

6 Ethnic Group, 7 Language, 8 Religion, 9 Transportation, 10 Communication, 22 Agriculture, 23 Animal Husbandry, 24 Fishing, 38 Foreign Investments, 39 Economic Policy, 40 Health, 46 Press, 47 Tourism, 48 Famous Persons, 49 Dependencies

本書は、中近東から大洋州にかけての広い地域を扱うが、東南アジアの国々は、もちろん洩れなく収められている。東南アジアを担当するのは、政治学者の Richard Butwell, Army Vandenbosch, Bernard D. Fall などのほか、地理学者の Frederick L. Wernstedt も加わっている。

本シリーズの特色は、それがよかれあしかれ、現代世界の諸国家についての百科辞典である点に求められよう。世界中のあらゆる国家についての基本的な素描がいながらにして得られる点で、比較政治学を志すものにとっては願ってもないガイドブックになる。たとえば、ビルマについては、一級の専門家の Butwell が、A 4 版の紙幅を10頁も使って、前掲の50項目について、要領よくまとめている。記述は正確である。各国別に掲載されている地図を見ても、地名の表記法はきわめて正確である。とりわけ感心するのは、各国の解説の最後に掲げられている Bibliography である。特定の国家についてこれから勉強しようとするときに、本書の Bibliography はまたとない手引きになってくれることだろう。ビルマについては42冊の文献が示されているが、その選択はまともである。

本シリーズの限界は、やはりすべての百科辞典がそうであるように、限られたスペースの中で、1人、2人の学者が、歴史から Flora and Fauna に至るまで触れねばならないということから生ずる。しかし、その点は、いわないことにしよう。なぜならば、本シリーズの趣旨は、そうした百科辞典的限界をあえて覚悟した上で、限られたスペースの中で、世界の国々のポートレートを正確かつ簡潔に描きあげるところにあるからだ。その限りでは、たいへん成功した試みであり、そこが本書の、地道ながらも高い評価を得てきている所以でもある。地域研究の入門的資料集の一つとして、その点の留保つきで、お勧めしておきたい。

(矢野 暢)

Robert E. Ward et al. *Studying Politics Abroad—Field Research in the Developing Areas*. Boston: Little, Brown and Company, 1964. viii+245p.

珍しい本である。Ward, Pye, Coleman, Weiner などの一級の政治学者が、新興地域研究にたずさわる政治学徒のために、フィールド・サーベイを行なう上での心掛けを、いろいろの角度から説いた本である。

参考までに全体の構成を掲げると、

.....

II. Lucian W. Pye, The Developing Areas: Problems for Research

III. Robert E. Ward, The Research Environment

IV. Robert E. Ward, Common Problems in Field Research

V. James C. Coleman, Documentary Research

VI. Myron Weiner, Political Interviewing

VII. Frank Bonilla, Survey Techniques

VIII. Herbert H. Hyman, Research Design

.....

各章を担当する学者が、みなフィールド・ワークの経験者であるだけに、かれらの記述は決して観念的議論に流れず、生きている。本書は、文化人類学の手引きではなく、あくまでも政治学徒向けのガイドブックとして編まれているために、たとえば、各国の首都にある大図書館での文献研究をかなり強調するなどの特色も出ている。その観点から、巻末に、新興諸国一つ一つについて、主要図書館の内容と水準、データとして使えるような主要現地新聞の性格などをリストアップした詳細な Appendix——Coleman の手になるものである——がつけられていて、これがたいへん参考になる。この Appendix のなかでは、さらに、1963年段階において、アメリカのどの大学が、アジア、アフリカ、中近東のどの国で総合的地域研究を行なっているかが、国別に記録されていて便利である。

本書は、そうした実利的なメリットのほかに、新興諸国政治の概論書としても立派につかえる内容をもっており、とりわけ、新興諸国政治研究の新しい方法論について、参考にすべき議論をたくさん盛り込んでい。アメリカの新興地域学が、どういう方向に向かいつつあるかを占う上でも、たいへん便利な本である。